家庭礼拝のために

2024年9月1日

神の国で食事をする人は、さいわいです。

ルカによる福音書１４章１５節

黙　　祷	
讃 美 歌	８１
主の祈り	９３－５A（讃美歌21 P.146）
讃 美 歌	１９８
聖　　書	ルカによる福音書１４章１５節～２４節(新約聖書P.１１４)
祈　　祷	
使徒信条	９３－４A　（讃美歌21 P.148 ）
讃 美 歌	４５１
奨　　励	「招きの応答」
讃 美 歌	４５９
頌　　栄	２４

＊＊

奨励〔要約〕

ユダヤ人は、自分の家にお客様を招き食事をする習慣がありました。救い主が来られた時の祝宴（イザヤ25:6）を覚えてのことでしょう。招く側は、献立から席次に至るまで、気を配って準備しましたが、宴会は、自分の力を誇示し、人の誉れを受けるものとなり、招かれた側は、返礼も必要だったのです（13:1～14)。イエス様は、このような宴会の様子をご覧になって、貧困や障害のために返礼のできない人を招くなら、神様からの報いを得ることを教えられました。この話を聞いた一人が、口から「神の国で食事をする人は、さいわいです」と言葉が出たのです。これを聞いて、イエス様は、たとえを用いて盛大な晩餐会への招きの応答について教えて下さいました。晩餐会に招待された人は、準備をして待つのが普通です。晩餐会に出かけ、食事を頂くことは難しいことでなく、喜びの時ですが、僕がつかわされた時、彼らは「みんな一様（他訳：口実をもうけて）に断りはじめた」のです。“口実”は、自分の立場を守り、心の痛みを軽くするための理由づけです。各々、土地を買った、５対の牛を買った、妻をめとったと、人生の中でも重要な出来事をあげていますが、どの言い訳も晩餐会を断る理由ではありません。土地は有益か、代価に見合うか、よく見て買うものです。牛を買う時は、前もって健康状態を調べるでしょう。妻を娶ったことの言い訳は、戦争が行われている時の特例（申命記24:25）をあげています。晩餐会の招きを断る理由とはならないのです。招かれた人たちは、御言葉に親しんでいたユダヤ人たちでした。彼らは、神様を信じ、律法を守る努力をしていましたが、神の国の晩餐会よりも、自分にとって価値のあることや好ましいものを求めたのです。主の招きに答え、主の晩餐に預かったのは、ユダヤ人からさげすまれた貧しい人、差別された人、異邦人たちでした。彼らは、救い主の愛の招きを信じ、招きを心から喜びました。自分の無力さ、罪深さ、社会から疎外された悲しさを知っていたからです。主の招きに答え、その食卓で御言葉に満たされたのです。イエス様は「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マルコ2:17）と言われたことを心に留めて応答したいのです。

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。（Ｉテサロニケ５：１６～１７）